

まきむく

纏向
考古学通信
Vol.18
2024.09



▲纏向遺跡第195次調査の土壤中からみつかった遺存体
(写真提供: 奈良女子大学文学部人文社会学科・宮路研究室)

特集 |

纏向の土に残る微細なモノ

令和5年度まきむくレポート

纏向幻想—卑弥呼に会いに行く(5)—

まきむく裏物語：観察で土器のことを知ろう

縄向の土に残る微細なモノ

縄向遺跡ではこれまで200回以上に及ぶ発掘調査を実施し、考古学だけではなく様々な学問分野の手法を用いて、遺跡の姿に迫ろうとしています。特に自然科学分野の手法による分析は「自然科学分析」と総称され、その中には「土の中の生物の痕跡」を対象にした分析があります。土（土壤）を持ち帰り、含まれる微細なモノ（遺存体）を確認することで、通常の調査では知ることの難しい周辺環境などの情報が得られます。例えば、花粉分析・寄生虫卵分析・珪藻分析・プラントオパール分析などが挙げられ、遺跡の性格や調査状況の時々に合わせた効果的な手法が選択されています。

今回は実際に実行している分析手法の一例として、土壤から遺存体を回収し、その種類を特定することで生活環境を復元する動・植物遺存体同定分析についてご紹介します。

分析の手順～動・植物遺存体同定分析を例に～

STEP.1 土壤の採取

調査に用いる土壤は、時期と場所が明確な必要があります。そのため、条件の良い遺構の埋土を選び、紛れ込みがないように採取し、^{のう}土嚢などに入れて持ち帰ります。遺構埋土の状況によって、上層・中層・下層というように分層し、後でどの層の土か確認できるようラベルを付けておきます。



STEP.2 土壤の分離

持ち帰った土壤に含まれる遺存体と土を分離します。分離の方法は大きく分けて、「フローテーション法」と「水洗ふるい選別法」の2つがあります。「フローテーション法」は、土壤を水に入れ攪拌させることで、比重の軽い炭化物などを浮かして取り出す方法です。「水洗ふるい選別法」は土壤を網目の細かいふるいにかけ、微細な遺存体を回収する方法です。これらの選別法を組み合わせて遺存体を回収します。



STEP.3 遺存体の同定

土壤の分離によって確認できたモノは植物の種子などの「植物遺存体」と動物の骨や昆虫の体の一部などの「動物遺存体」に分けることができます。遺存体を大きく選り分けた後に、標本などを参考に種類を特定します。これらの同定作業はそれぞれの専門家の元で行われます。



分析で何が分かるのか～第195次調査の成果～

分析の結果からどのように遺跡の姿に迫ることができるのか、纏向遺跡第195次調査で実施した分析の成果を例にご紹介します。第195次調査は太田微高地という纏向遺跡の中心的な区域で行われました。分析には3世紀後半頃のものと考えられる土坑SK38の埋土を使用し、多くの動・植物遺存体が見つかっています。

動物遺存体では、げっ歯類（例：ネズミ・リスなど）の歯や水辺に生息する水生甲虫の破片が多く確認されています。他にもチャバネゴキブリが発見されており、定説よりも遙かに早い段階で国内に生息していたことが分かりました。植物遺存体では、スゲ属、カナムグラ属などの草本植物が多く見つかり、他にモモ・ウリ類・イネ・アサなどの食用植物の種子が完形に近い形で確認されており、これらは食用される前に土坑に埋められた可能性があります。

これらの遺存体の同定結果に加え、それぞれの遺存体の出土した層位などを考えることによって、土坑の堆積状況やその機能、当時の周辺環境などの解明につながります。

【参考文献】松田和花・佐々木香奈・梅原若羽・江崎日菜・宮路淳子・初宿成彦2024
「纏向遺跡第195次調査SK38土坑から出土した植物および昆虫類について」『纏向学研究』纏向学研究センター紀要第12号



土坑SK38土層断面



動・植物遺存体
(上:モモ・イネ等の種子
左:チャバネゴキブリ)

研究活動の広がり～奈良女子大学との共同研究～

今回ご紹介した纏向遺跡の土壤調査は、纏向学研究センターと奈良女子大学との共同研究で行っており、動物遺存体の分析では大阪市立自然史博物館と連携し、植物遺存体の分析では奈良教育大学と一般財団法人文化財科学研究センターの指導のもと同定作業を実施しました。このような他機関との研究連携により学際的な研究を行うことができます。

分析成果は当センターの研究紀要や定例研究集会で報告され、令和2年度桜井市立埋蔵文化財センター特別展「遺跡を科学する」では奈良女子大学の学生と共同で展示を行いました。現在も共同研究による分析事業を進めており、新たな成果を皆さんにお伝えできればと思います。



定例研究集会での成果発表



学生による展示作業の様子

纏向学セミナー

年に2回、纏向学に関するテーマにて、お招きした研究者に講演いただき、その後当センターの寺沢薫所長と対談いただく企画です。

第18回は2023年7月25日に寺沢所長による「卑弥呼とヤマト王権」の講演後、柳澤伊佐男氏(NHK奈良支局記者)との対談、2024年1月6日の第19回では福永



▲第18回：柳澤氏と所長の対談

伸哉氏(大阪大学教授)をお招きし、「ヤマト政権成立期の大和川と淀川一畿内内部の地域関係をさぐるー」と題して開催しました。会場の人数制限も解除され、2回で計約530名の方にお越しいただきました。皆さん、熱心に耳を傾けておられました。



▲第19回：福永氏と所長の対談

東京フォーラムX 「纏向学」発信! 前方後円墳創生－纏向遺跡と古墳時代の始まり－

2023年11月25日に東京都千代田区有楽町のよみうりホールにて開催され、約700名にご参加いただきました。今回から新型コロナウィルス拡大防止のための時間短縮や入場制限が解除され、例年どおりの規模での開催となりました。

第1部では、佐々木憲一氏(明治大学教授)、橋本輝彦統括研究員、苅谷俊介氏(日本考古学協会会員)、辰巳和弘氏(古代学研究者)に講演をいただきました。第2部では、寺沢所長がコーディネーターを務められ、講師の

方々をパネリストとしてシンポジウムを開催しました。前方後円墳のはじまりについてのテーマでは、それぞれの立場から前方後円墳をどのように定義するのか活発な議論が交わされました。前方後円墳の登場とその背景についても迫り、話題の尽きない内容となりました。

参加者の皆さんも興味深く講演・シンポジウムを聴講されていました。



▲東京フォーラムの講演の様子



▲東京フォーラムのシンポジウムの様子

纏向考古楽講座

纏向遺跡や考古学に興味のある初心者向けの講座です。2023年12月9日、16日に2回連続講座として開催し、6名の方にご参加いただきました。今回は「モノの観察からわかること」をテーマに、実物の土器を触り見ることを体験していただきました。

第1回では、年代の異なる土器を観察し、それぞれが持つ特徴がどのようなものなのか参加者とスタッフが互いに会話をしながら各自の自由な発想、視点での



▲考古楽講座の解説の様子

観察を楽しみました。第2回目では、実物の土器と実測図を観察から照合し、実測図の意義と見方を知っていただきました。また、土器を年代順に並べるクイズを出題しました。

参加者の皆さんは纏向遺跡から出土した実物の土器を手に取りながら、真剣な眼差しで観察に取り組まれていました。



▲考古楽講座の土器観察の様子

纏向学研究センター日常のコマ



▼テレビ取材を受ける寺沢所長

卑弥呼のイラストについて説明する所長。細かな意匠にもそれぞれ意味があります!



▼アプリ宣材写真の撮影

纏向遺跡の魅力を体験できるアプリ「YAMATO桜井周遊ARガイド」のPR写真を撮影中!



発掘調査でみつかった古墳時代の犬の骨!どんな姿をしていたのだろう?

▲纏向犬検討会の様子



前回までに、中国の史書に描かれた「倭国乱」の背景や実情を概観的に見てきた。未完成のタイムマシンでは、文献に残された既成事実と考古学によって枠組みを構築し、この目で垣間見たようすを補填しながら筋道を書き綴るしかない。

しかし、このタイムマシンで大陸と列島を行き来しているうちに、なぜか突然スケールが細かくあうこと がまれにある。今、このマシンのスケールはなぜか 204～5年を細かく指している。それが正確なら、決定的瞬間^{のぞ}が覗けるかもしれない。それはまさに公孫康^{ほてん}が帶方郡を新たに設けた直後のことだからだ。

◆
遼東の郡都（国都）襄平にある公孫康の宮殿では連日、魏や呉の動勢が報告されるなか、側近や武将たちが慌ただしく動き回っていた。献帝を擁して許（許昌）に都を移した曹操の推挙で「永寧郷侯」に封じられたとき、父の度は怒って印綬を武庫に放り込んだらしいけれど、すでに皇帝は東夷を絶域として、海北の海事一切を左將軍の公孫氏に委ねていた。

倭国は韓から大海を越えて島伝いに南へと連なり、呉の領域である「会稽・東治の東にある」と認識されていたのである。魏の対岸にある韓と呉の背後にある倭国を臣属させることは公孫政権にとっては重要課題であった。

しかしこの時、倭国内部は政治的混迷を來していた。「とにかく倭国の盟主たるイト国との臣属を急ぐべきだ」「いやいや、イト倭国じたいもはや一枚岩ではなさそ

うだ。諜報ではキビこそが次の盟主に相応しいとも聞く」「イヅモも韓と通じているとの噂もある」「直接工作を急ぐすべきだ」。

この時、韓三国のクニ・国はすでに公孫に臣属していた。公孫氏は大軍を率い馬韓、弁辰の外臣をも引き連れて対馬を経て、壱岐國の王都原の辻の外港深江湊に上陸する。イト国の出先は大慌てで公孫康の書簡を携えて状況説明に走る。直ちに、一行は今津湾に停泊して、軍を引き連れて井原にあるイト国王都へと向かう。

「いま海北、海事のことはすべて皇帝から委ねられている。ついては、倭国は遼東王（燕王）のもとに礼を尽くし帰属せよ。ただ、情報に拠れば倭地には東域にも大国があると聞く。それらも総じて臣属させるべきであるから、早々にその準備を行うべし」。

とはいえ、今のイト国（イト倭国）王が東方のクニ・国を自力でまとめあげることなどできようはずはない。公孫の工作は直ちに始まる。主要なクニ・国にイト倭国や韓の使者を案内として同行させて、軍を伴った使節が送られ公孫康の檄書が伝えられる。「同調する者は同盟する周囲のクニグニの意向も集約して〇年〇日を以て、イト倭国内の某所〇〇に集合せよ」。

◆
こうして、イト国王とイト倭国内のおもな王やオウ、そして西日本の主要なクニ・国オウ（王）が某所に集結する。当時の曖昧な地図では、タイムマシンのGPSの示す位置を正確に知ることができない。どうも奴国連合の傍国居館のようだ。目前のわずかばかりの平野の向こうには湊が見える。西と北は海が開け、背後には低い山が迫っている。

居館は公孫の軍隊とイト倭国軍の兵に堅固に護られ、所々に各国の護衛の兵のすがたも見える。高床の広い集会場の板敷きの奥には公孫氏の使者と、なぜかナ国王が並んで坐っている。立って間もないイト国女王に替わって仲介役を買って出たのだろうか。その前には各クニ・国王たちが足の踏み場もなく対面して座っている。入り切れずに外で待機するクニの使者さえあるようだ。

◆
時を待って、公孫の使者がおもむろに、しかし強い語調で語り始めた。通事（通詞）のことばが逐一後を追う。永年、イト倭国に対しては一言ならぬ不満を持っていた東方諸国は、この政治的にも経済的にも停滞した緊張の時代を早く抜け出したいと念じていたから、この案件にはある意味捨てがたい魅力を感じていた。

通事のことばさえ十分には理解できていない顔のオ

ウもいるなか、続いてイト国女王が、公孫に臣属すべく新たな倭国の構想を描く。そして、イト倭国（王）の東方への拡張を前提とした新たな倭国王の選出へと話が進んだとき異論が噴出した。

先ずはキビの王が口火を切る。衰退した後漢王朝の権威に拠ったイト（倭）国に自国の行く末は委ねられない。新たな倭国連合の盟主としてはふさわしくないと言い切る。数年前、イト国王の靈繼承の秘儀を取り入れ、列島最大の双方中円形の墳丘のなかで先王から王たる権威と資質を引き継いだという自負と、同盟傘下のクニ・國の王を従えたことからの発言であった。サヌキ、イヨ、ハリマ、アワなどの王たちもキビのオウこそ相応しいと声を揃える。

しかし、ほかのクニ・國の王も看過してはいない。イヅモの王たちは矢継ぎ早に新たな倭国王はイヅモから出すべきだと主張する。タニハやコシのクニ・國もこれに同調する。自ら開拓した韓との交易の権益や日本海に沿った物流を主導した経済力を強調する。

近畿のクニ・國は政治的、社会・経済・文化的な安定性こそが新たな倭国にとって必要だと自国の安定性を説く。だが他国ほど自国に引き入れようという強い気概はないらしい。意外なのは、イト倭国内にさえイト国中心の強硬意見が多くなかったことだ。そうか、これがあえて公孫とイト国王の仲介を買って出た本音だったのか。

百家争鳴。まとまるようすはまったくない。しかも、そこにはさらに東の地域のクニ・國のオウの顔は見られない。こうした構想自体への造反なのか、それとも状況の静観、牽制だろうか。解決の糸口が見えぬまま一日は過ぎていった。



翌日、公孫の使者は命令口調で強く言い放つ。「我々は軍を送り込んで強制的に新たな倭国を編成することをも辞さない。しかし、それは我々にとっても貴国にとっても本意ではあるまい。」じっさい、今の公孫にとって海外の遠交の地を武力で略取する意図も余裕ももとよりない。しかし、時間はかけられない。使者はそれを避けるべく、王朝の大儀を翳^{かざ}して一つの提案を持ち込む。いや、提案と言うよりはもはや同意書に近いものだ。そこには最も重要な新倭国王の名も記されていたらしい。これに応じなければ中国との関係で倭国の未来はないとまで言い切つただろうか。

その案には、あのナ国王も苦虫を噛み潰したような



©構成/寺沢薰・絵/西田千秋

面持ちでぐっと目を見開いていた。イト倭国（王）の動搖が見て取れる。イト国女王は盛んにナ国王に目配せをしつつ反論するもナ国王は動かない。イト倭国側にとって決裂することのできない情況がすでにできあがっていたのである。キビやイヅモ、その周辺のクニ・國のオウたちも決して諸手を挙げて賛同したわけではない。近畿やそのほかのクニ・國のオウ（王）たちだけが納得するように頷いた。

大筋は決定した。公孫の使者はただ一言、最も重要な具体的な会盟文の骨子を早急に作成するよう促し、とりあえずその場を引いた。その後も、昼夜を通しての議論が続いた。そこでは、新たな倭国王のためにどのような政治組織で結集するか、新たな都はどこにおくのか、イト倭国（王）の取り扱いをどうするのか等々が議論された。漏れ聞くところに拠れば、この枠組みのなかで会同を主導したのは、やはりイト国とイト倭国内の有力国々、キビ國連合の国々、イヅモ國連合のクニ・國々などであったという。



こうして、世紀の政治的大談合はとりあえず成功裡に終わった。公孫氏の使者は使節と軍隊の一部を逗留させて、新生倭国設立までの進行状況を逐一報告させ、来たるべき帶方郡への朝貢の日程調整に入った。

残念ながら、部外者の私はこの会同のさまを部屋の外から垣間見ることしか許されない。部屋から出てきた要人を捉まえてはインタビューを試みる。誰も答えようとはしない。新しい倭国王の実像に関しては實際よくわかっていないようだし、口外しないよう縛りがかかっている。新しい倭国王は女性らしいという噂もある。会盟文の骨子が手に入るまで、今少しこの地に身を置いて待つことにしよう。

（つづく）

昨年度の纏向学講座では「モノの観察からわかるここと」をテーマに土器の観察を体験していただきました。

さて、その時はあまり深く触れなかったのですが、纏向の土器には纏向の地で作られる「在地系土器」と他地域の人によって運び込まれたり、作られたりする「外来系土器」があります。纏向遺跡で出土する外来系土器の割合は全体の約15～30%で、その範囲も九州から関東に及び、他の遺跡と比べても突出しており、纏向遺跡が他地域から多くの人々が集まる当時の中心地であったことが土器の分析によって分かっています。

各地の土器を見分けるには、それぞれの地域の土器に特有の形状や製作技法、胎土などの観察が大切です。とはいえ、在地つまり纏向の土器にも実はバラエティーがあるため、纏向の土器を見定めるのも難題です。

土器の見分け方は報告書や論文を読み、知識として身に付ける以上に、多くの実物の土器に触れることで身に付きます。かくいう私も講座を通して、もっと土器に触れ、観察力を磨かなければいけないと再認識しました。考古資料の価値・魅力は実物に触れてこそ体感できるものだと思います。皆さんも体験講座に参加したり博物館の展示を見る時に自分なりの観察をしてみると新しい発見があるかもしれませんよ。

(巽優貴)



▲纏向遺跡出土の外来系土器

展示収蔵室からのお知らせ

from 桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市立埋蔵文化財センター展示情報

・令和6年度 特別展『教科書の弥生時代を掘り下げる
－桜井市内出土資料をもとに－』

会期：2024年10月2日（水）から
2024年12月1日（日）まで

桜井市内の弥生時代の遺跡や出土品から、学校の教科書で学ぶ弥生時代の暮らしについてより深く理解していただくことを目的としています。

・令和6年度 企画展

会期：2024年12月4日（水）から
2025年4月20日（日）まで

各展示の最新・詳細情報は、右記ホームページをご覧ください。

▶桜井市ホームページ（埋蔵文化財センター）
<https://www.city.sakurai.lg.jp/sosiki/kyouikuin/kajimukyoku/maizoubunkacenter/maibun.html>

開室：9:00～16:30
(入室は16:00まで)



閉室日：毎週月・火曜日、および
祝日の翌日

入室料：一般 200円（団体20名以上で150円）
市内在住の方・中学生以下の方は無料

所在地：奈良県桜井市芝58-2

問合せ：桜井市教育委員会事務局 文化財課
TEL 0744-42-6005

編集後記

初めて通信を作成し、自身の知識不足や文章の稚拙さを痛感しながら、所員の皆さんにも大変助けていただき、何とか無事に発行することができました。これからも、纏向遺跡の魅力発信により一層努めていきたいと思います。 担当：巽優貴

纏向考古学通信Vol.18

発行・編集 桜井市纏向学研究センター

発行年月日 2024年9月30日

所在地 〒633-0001 奈良県桜井市三輪686
芝運動公園内

TEL/FAX 0744-45-0590

*纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄附いただいた方に配付しています。